



俳句雑誌[おき]

---

9月号

沖 発行所

# 安居寺

能村 研三

## 市民会館の思い出

適塩に血のうすくなる更衣

梅雨晴や団地家並みのノスタルジー

冷やし酒限定売りの煽りあり

西日濃し配列変へぬ古書肆棚

沖の中央例会会の会場として利用している市川市民会館が、建て替えのためこの九月で取り壊されることになった。九百人が入るホールの吊り屋根の安全が保てないという理由である。昭和三十四年に竣工し五十五年目の建物、葛飾八幡宮の森の中にあり、文化会館などの施設とは違った趣きのある施設である。

句会中も両側の窓から差し込む日射しと境内の木々が風に吹かれるのが見え、秋は黄色に彩る銀杏黄葉が美しかった。時折は神社の太鼓の音が響き、句会をやっても変化が楽しかった。文化会館が出来てからも、市民俳句大会の会場としてはこちらの施設の方が良いという皆さんからの要望で使い続けてきた。

私が生まれたのが葛飾八幡宮のそばで、市民会館が建設される始終を子どもの頃しっかりと見ていたので、懐かしさは人一倍である。成人式の会場もここで行われ役所の入所式や研修など、選挙の開票事務も夜通しここを会場として行われたこと

湯引鱧刻み胡瓜を褥とし

丈長き振り子時計の安居寺

意味のなき敗者復活西日なか

歪みある校庭映画夕涼し

冷やさずに地酒の癖を楽しめり

草田男の沖登四郎の沖真炎天

も思い出の一つである。その後文化振興財団が管理を行うようになってから、仕事責任者として施設に関わったこともあった。

市民会館は今の場所に三年後の葛飾八幡宮の三十三年式年大祭に合わせてリニューアルされることになり、神社の境内のため大きなホールではなく瀟洒なホールと会議室が出来る予定で、完成後は句会にも利用できそうである。

そんな懐かしい会場だが、九月には「八幡・街回遊展」が開かれることから、これに合わせて「能村研三展」を開いてもらうことになった。少し面映ゆい思いもあるが、この会場との縁を考えやっていたくことになった。九月一杯の開催でこの期間中には二回沖の句会が行われることになってるので、是非多くの方に来ていただければ幸いである。

能村 研三

# 蒼茫集



天 使

安居 正浩

合歡の花天使隠れてゐるやうな  
日々好日と言へば言へるよ心太  
まとひつく白百合の香を引き剥がす  
ノスタルジアとは生節のある夕餉  
一抹の寂しさもあり夏の雲  
葛切りや 四条 大橋 雨の中

とんとん

辻 美奈子

梅雨晴や居合稽古の二刀流  
蓮ひらく風の神とは透明な  
勝率を問へばビールをまづ干せり  
最小公倍数浮草の殖えそむる  
夕焼に影を預けて人を悼む  
寝莫座かな風にとんとんしてもらふ

夜の噴水

荒井千佐代

太宰忌の蛇口より水ほとぼしり  
植田にも潮の匂ひや高曇り  
髪を梳くけふあぢさみは海の色  
さらさらと陽と砂こぼし荒布干す  
百日紅生きるが為に死を思ふ  
介護子へ夜の噴水を見てをりぬ

万 緑

大畑 善昭

万緑やまなこ眠れば田村麻呂  
古き世の血染めのいくさ郭公鳴く  
鐘五つ撞き万緑へ男去る  
泥鰯ゆらゆら光太郎山居の地  
ここに詩人住みにき夏炉青く焚き  
光太郎の凜たる遺墨涼しかり

すぐ降参 北川英子

とうしみの影ごと羽根を畳みけり  
熱帯夜拭ひ尽くせぬものあまた  
炎天を少し窺ひすぐ降参  
あはあはとうすすと昼顔強し  
恍惚と水より生れし火の螢  
傘寿とは死に時と決め三年や盆

朝めし 遠藤真砂明

朝めしがうまし生きたし南吹く  
天牛が啼いてもがいて網がらみ  
海風のはちきれさうにキャンプ村  
大釜の荒布いよいよ煮えたぎる  
岬から明ける半島ほととぎす  
漁労長おそろし誰よりも日焼

カフェ・オ・レ 千田百里

小学唱歌の文語体なる涼しさよ  
光源氏と名付けしばらの蔓気まま

白地着て私の世いつもスパイシー  
カフェ・オ・レ嫌ひがひとり巴里祭  
国捨てしフジタの「白」や巴里祭  
真昼間のひまはり焦げてしまひさう

逆転 藤原照子

蓮ひらく瞬の吐息を聴きもらす  
暁光や袱紗びらきの花菖蒲  
いつよりか逆転の子とうなぎ飯  
睡蓮の万の静寂や亀浮かぶ  
朝涼やすこし寄り目の目玉焼  
わが余命詩の余命や星まつり

誘ひけり 田所節子

紙の束ずしりと暑さ誘ひけり  
まくなぎや多勢といふを力とし  
風が遊ばす蓮の葉の雨しづく  
謀叛めく一ひらに蓮くづれ初む  
新しき水に押されて泉湧く  
苔咲いてゐるごつごつの桜の木

で で 虫 森岡正作

剣のごと竿持つて入る鮎の宿  
でで虫の太れる甲斐の国境  
一日足る夕ひぐらしのさざ波に  
墓が守る曹洞宗の父の墓  
目瞑りてなほまくなぎを増やしけり  
万緑の手前で降りて八王子

単 純 楠原幹子

晩年は単純がよし立葵  
白玉や親孝行の覚えなく  
一途さの時に厄介凌霄花  
まくなぎは顔のあたりが好きらしき  
オンザロックの氷つぶやき夜の薔薇  
ビール酌むふといつまでの二人なる

悠 久 の 刻 宮内とし子

ひまはり畑太陽すつぼり入りけり  
青葡萄しなの山は雨を呼ぶ  
大賀蓮悠久の刻流れけり  
葉隠れの苔紅濃き古代蓮  
梅雨深し噛みて甘味の五穀米  
夕顔や身辺整理少しづつ

威 嚇 久染康子

会心のうねりにサーファー翼得し  
曲る度余力はみ出す出水川  
羽拔鶏威嚇に広ぐ脇白し  
夕立宿りの旗亭に嵌つてしまひけり  
親類まで見舞に來たる暑氣中り  
足跡確と多摩支部青嶺目ざしけり

噴水の裏 甲州千草

ゆつくりと箒を使ふ朝曇  
クイーンの名を貰ひたる屑金魚  
ぎくしやくと燕巢立後水甘し  
湯に噎せる冷房直に当る席  
噴水の裏より古稀の近づけり  
シャワー全開忘れてよいといふ勢ひ

鋭 角 林昭太郎

フラスコは火を待つかたち青葉冷  
青葉の夜ダンス教室音あふれ  
更衣山河もつとも青きとき  
リモコンに釘ぎつしり梅雨長し  
梅雨晴間鉄棒すこし鉄くさし  
齒磨の肘は鋭角朝ぐもり

夏 霞 鈴木良戈

曳く船も曳かるる舟も夏霞  
麦藁帽夕日を載せて戻りけり  
軽鴨のぶきつちよ潜り繰り返す  
朝顔市法被少女の伝法に  
向日葵の気色ぼんだる日向かな  
梅雨晴れや天神様の鬼瓦

気圧の谷 上谷昌憲

ほととぎす気圧の谷を遡る  
逆しまに蜥蜴の滑る真昼かな  
武蔵野の雨の微塵に椎の花  
新じやがをほつこりと蒸し自足とす  
慇懃に齒科医の脅す熱帯夜  
七夕笹乾き切つたる地下広場

古代蓮 河口仁志

雨晴れて不惑の色の濃紫陽花  
合流の川の濁りや梅雨出水  
沼底の泡立ち上る古代蓮  
大賀蓮見る廻廊の昼下り  
暁光の風に秘色の蓮咲けり  
雲割れて日矢の差し入る古代蓮

青梅雨 瀨上千津

星まつり在宅介護に托すこと  
梅雨苔の瑞の精気よ踏むまじく  
青梅雨のこめかみに置く思惟の指  
螢火よ初心絶やさぬ来世あれ  
藪枯らし摺り立ちの我が抜く  
烏海山晴れて人亡き合歡の里

銅光り 湯橋喜美

埋め尽くす蓮華潮風押しもどす  
掌占むひとひらの蓮華もて  
父につく逸りごころの麦藁帽  
ポットウイスキー工場にて二句スキル据り真夏の銅光り  
奥深く積まれて涼しオーク樽  
草刈るや夫が遺せし砥石痩せ

優曇華や 酒本八重

古語辞典なにやら昼寝覚に似る  
優曇華や蔵に仕舞はる法事膳  
黒南風やとくに重荷となる会話  
野面積みの間よりひそか苔涼し  
そのことに触れず螢を見しと言ふ  
無名にて果つるもよしと茅花とぶ

# 潮鳴集



棒切れ

菊川俊朗

夏めくやホースの先を強く持ち  
梅雨深し波打つてゐる電話帳  
蛇の衣こんな大人にならうとは  
親分のごとき一羽も羽拔鶏  
棒切れを捨てて夏野を終らせる

少し休めと

安藤しおん

滝壺を手足短かく覗き込む  
走り根に少し休めと山清水  
紫蘇揉んで居り呼鈴の鳴つてをり  
帰省子のぬつと手を貸す天ぶくろ  
大奥とふアートの金魚緋を散らす

乗り物

齊藤 實

時の日や乗り物すべて折り返す  
片かげり家のかたちの好き勝手

缶蹴りの缶ぼつねんと大西日  
籐椅子の軋みゆたかに老いにけり  
水打つて広くなりたる家の前

風の記憶

栗原公子

二千年の風の記憶か蓮揺るる  
夕顔や分れてよりの回り道  
滝あふぐ悩みなきかに口あけて  
滝の前なんと小さき嘆きなる  
をさな児は蟻も友だち話しをり

耳行脚

内山照久

池の面に古代の吐息大賀蓮  
箱庭や思ひのたけの都市計画  
滝音を辿りて巡る耳行脚  
何時の間に子は親を抜き立葵  
闇に浸かりて蛩の出を待てり



# 沖作品



# 能村研三選

海桐花咲く記憶の底に海難史

千葉

小河原清江

羽蟻の夜蔵の三和土の湿り艶  
雉の子の喉裂くるまで声を研ぎ

火蛾舞へり金翅銀翅のあやふかり  
傍線に青春の黴利一の書

長崎

福山 和枝

能面の虚ろな視線夕薄暑  
朝凧や湾に響もす帰漁船  
煩惱のやうに湧き出づ十字花

海風に色の潤ふ夾竹桃  
濃紫陽花小さなポエム集まりて

福岡

伊藤 照枝

白菖蒲武家の老女と会ふごとく  
菖蒲園 十万本の整列す  
花菖蒲終りは己抱きしめ  
空想の羽を広げて合歡の花

田水張り田毎に美しき加賀の月

千葉

神戸やすを

三川を越えて濃尾の走り梅雨  
東京を一喝したるはた神  
恙無きやうわが身虫干す大日向

鯛や自足を旨に過疎の村  
爪立ちて観るパレードや白日傘

福岡

小田 里己

押入れといふ闇ありぬ半夏生  
一枚の野辺一對の夏の蝶  
いもうとのやはらかな肩夕端居

星涼し密漁船の走り去る  
麦秋や犬も眠なうら痒さうな  
体操の手足きびきび衣更へ

茨城

島田 浩美

杖の歩に白靴といふかるさあり  
紫陽花の喝采浴びし子の華燭  
祝婚や涼しき距離の始まりり

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

羽蟻の夜蔵の三和土の湿り艶 小河原清江

小河原さんは大網白里にお住まいで、ここで詠まれた蔵というのもご自分の家のものだろう。三和土と書いて「たたき」と読むが、土、漆喰、苦汁からなり、この三者の配合が左官職人の技となる。コンクリートの無い時代、雨や雪が土間に降りこんで泥濘にならないように工夫された。梅雨時など気温が一気に上昇した時に羽蟻が発生しやすいが、こんな時は三和土は湿気を吸収し湿り艶が綺麗である。断熱性に富んでいるので夏は涼しく感じられる。

あをあをと湯気より生るる豆御飯 福山 和枝

「食べ物美味しく詠む」というのが先師がよく言っていたことだが、ちなみに先師もこの豆御飯が好きだった。出来上がったばかりの豆御飯、炊飯器の蓋を取ったとたん立ち上る湯気。その湯気もほっこりとお箸に乗せて食べたい気分分、ふーふーと吹き散らしては勿体ないようにも思える。湯気も豆ごはんの

味、風味なのだ。

空想の羽を広げて合歡の花 伊藤 照枝

合歡の花は他の花の咲きようとは異なり、化粧用の刷毛のようなピンクの花を咲かせる。しかも空にふわっとやさしく向けて開くので鳥の羽のように見える。この美しさを作者は空想の世界へ羽ばたかせているように感じとった。合歡の花のたとへば「歓喜」「創造力」。密やかな山間に咲く優しい花はほとんど空想を広げていくようでもある。

東京を一喝したるはたした神 神戸やすを

最近東京を襲うゲリラ豪雨は思わぬ被害をもたらしている。これはヒートアイランド現象によるものなのか、エアコン、自動車などによる人工排熱量の増加など、大都市中心部の気温が周辺より際だって高くなる現象によるものらしい。昔から雷は、「地震・雷・火事・親父」とあるように、怖いものの象徴とされてきた。はたした神とは、これを擬人化したものだが、大都市のこうした現象を作り出した人間に対する一喝なのであろうか。

一枚の野辺一對の夏の蝶 小田 里己

この句は「一枚」「一對」と「一」という数詞を効果的に使った句である。鷹羽狩行氏の句に「一對か一對か枯野人」飯田龍太氏の句に「一月の川一月の谷の中」というのがある。数字を使う効果は、ともすれば象徴的になることである。特に俳句には比較的多く使われる。真つ平な野辺から突然現れた一對の夏の蝶が見事に描写されている。(以下略)